

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

Library News

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

What is done can be undone.
Library News
Time flies.
Library News
What is done can't be undone.

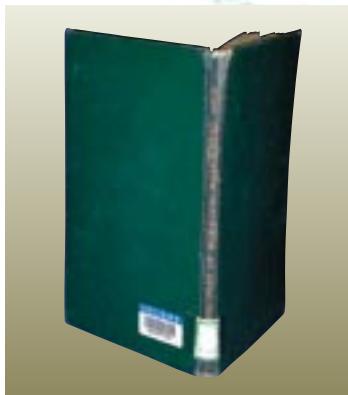


特集
貴重本紹介

貴重本紹介シリーズ 3

科学的管理法の諸原理 —理論としての経営学の出発点—

contents
目次



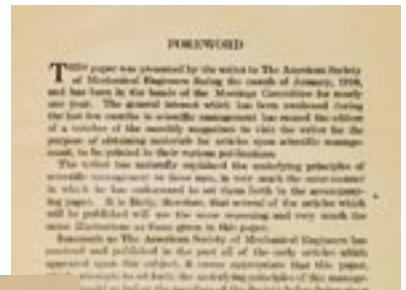
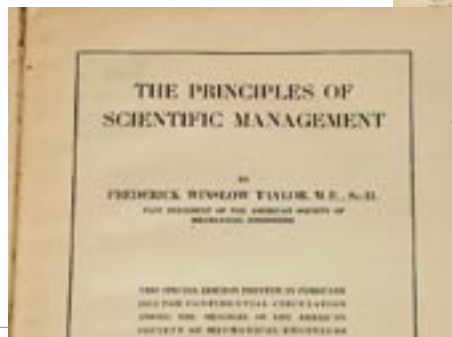
▲上記の図書は、本学図書館に所蔵されている1911年公開された初版本である。

今日世界の経営学の中には、アメリカの管理論・組織論がある。そこには合理主義的理論、人間関係論、行動科学的組織論という互いに密接に関連している三つの系譜がある。私たちが書店などで見かける大企業の経営戦略についての書物は、最も新しい系譜である行動科学的=意思決定論の系譜の代表である。

これら三つの系譜の起点となり、経営者の個人的な経験や直観から理論としての経営学を確立したのは機械技師であったテイラーFrederick Winslow Taylor (1856-1915年)の一連の著作であり、活動であった。テイラーの経営理論に対する貢献は、これまでの経営者や管理者の個人的な経験や熟練を科学的客観的に検討し、合理的な理論へと定式化しようとしたところにある。彼の理論が、今日科学的管理法とよばれ、理論としての経営学の出発点と高く評価されているゆえんがそこにある。

1911年に公開されたThe Principles of Scientific Management (「科学的管理法の諸原理」)は、彼の既発表の論文を集めたものであるが、テイラーの管理論のエッセンスが四つの基本的原理により定式化され、彼の思想・理論の基本的枠組を明確に示すものとなった。ここで示されている考え・理論は、既に述べたように理論としての経営学の出発点であり、また今日華々しく展開されている経営戦略論など、最新の経営理論にたいしても中心的な論理を提供しており、経営学にとって重要な意義を今後も持ち続けると思われる。

随想	2
経済学部教授 坂本 雅子	
国内外の図書館	3
法学部助教授 辻田 芳幸	
読書ガイド	4
人間生活科学部講師 楯 誠	
経済学部教授 石田 隆造	
経営学部助教授 荒鹿 善之	
短期大学部教授 武田 康雄	
学生コーナー	6
経済学部 紙谷 真吾	
人間生活科学部 藤原 知弥	
法学部 森 政史	
経営学部 谷口健太郎	
図書館からのお知らせ	8



経営学部 教授
丸山 祐一



再会に思う

経済学部 教授 坂本 雅子

先日、大学時代の友人・10名ばかりと、卒業以来「数十年ぶり」に再会した。長く北京特派員だった友人が帰国したので、彼の慰労を名目に「会おうよ」ということになったのだ。自分の「青春時代」に再会したくなる、私たちがそんな年齢に達したということなのだろう。

友人たちの外見は案外変わっていなかった。しかし、こども語り合われた彼らの「企業人生」は、あまりに重かった。なかでも商社勤務の二人の話は衝撃的であった。二人とも「超一流」の総合商社に勤務していたが、一人は入社後、学生時代に自治会の役員をしていたことが発覚し、たったそれだけの理由で、海外勤務から外され、数十年の間、稚内を皮切りに国内の「僻地」を転々とさせられた。もう一人の、別の商社に勤務していた友人は、最初は「出世コース」を歩んでいたが、労働組合の委員長になってからは、閑職に追いやられ、結局、何人かの同僚とともに「隔離部屋」と通称される部屋に「配属」された。出入りすらチェックされる部屋で、仕事はほとんど与えられず、最後は社内の各部署・同僚に郵便物を配達する仕事を長年させられたという。

私は彼らの話を聞きながら、山崎豊子の小説『沈まぬ太陽』を思い出していた。日本航空で労働組合の委員長をつとめた人物をモデルにした実話ともいえる小説である。主人公が組合の委員長になったために、会社と会社の側に立つ人間に徹底的に排除され、罠にかけられ、世界の「僻地」を転々とさせられながらも、誇り高く、力強く生きていくさまを描いている。『沈まぬ太陽』の世界は、高成長を遂げたこの数十年の日本の数多くの企業に実在した世界だったのだ。

友人は「隔離部屋のだれが、いつ自殺しても不思議じゃなかった。だからいろんな楽しみや企画を、その部屋のみんなでやったんだ。誰も死なせず、それだけは誇りに思っている」と、昔のままの優しく繊細な、しかし、しっかりとした口調で言った。彼が学生時代「好きなんだけど、黙っているのさ、遠くで星を見るように…」と、その頃流行っていた歌を、ガリ版印刷をしながら小声で口ずさんでいたのを、ふと思い出す。

巨大企業が何故、働くものにそんな非道な仕打ちをするのか。それは、労働組合を潰すため、「人権」を守ろうとする人間を「みせしめ、さらしもの」にし企業から「根絶」し、働く者の抵抗力を奪うため。こうして、長い年月の間に、まともな労働組合や運動は日本の企業から根絶やしにされてしまった。

しかしその結果はどうだろう。日本は今、かつてないほど働く者にとって生きにくい社会になっている。解雇は簡単に行われ、仕事は不安定である。就労を希望する青年(15才～34才)の4割以上がフリーター(無職かパート・アルバイト等)にしかねない(内閣府統計)。労働時間も長く30代男性では24%が週60時間(1日12時間!!)以上働いている。貧富の差も拡大し、非正規雇用(派遣等)の社員の約4割が月給10万円以下である。働く者に対してこんな苛酷な社会が長期の経済発展をすることなど不可能だ。GDPの5割以上は個人消費なのだから。

私たちの世代は本当に精一杯生きてきた。しかし今、こんなになってしまった社会を、若い世代にこのまま引き渡して、それで良いのだろうか、そんなことをあらためて強く考えさせられた「再会」であった。



マックス・プランク 知的財産研究所図書館 (ミュンヘン市)

法学部 助教授 辻田 芳幸



▲マックス・プランク知的財産研究所

1180年以降ヴィッテルスバッハ家の宮廷都市として繁栄しました。王様たちは学問や芸術をこよなく愛し、多くの学者や芸術家たちを呼び寄せたので、ミュンヘンは今もなおドイツでも有数の学術・文化都市となっています。

このようなミュンヘンには、知識を後世に伝えるという大きな役割を担った図書館が数多くあります。例えば、ベルリンに次ぐドイツ第二の規模を誇る州立図書館やミュンヘン大学(LMU)の中央図書館は、幅広い分野の資料を擁する総合図書館としての役目を果たしています。さらに特定の分野に特化して資料を収集し、研究に供している専門図書館があります。学部図書館や裁判所図書室、MPIの図書館はそのひとつとして機能しています。

MPIの図書館は研究所建物の下層部にあります。閲覧室は館内1～中2階にあり、地階の閉架書庫、複写コーナーとは区分され、研究環境に配慮されています。閲覧室は若干の座席を除いて、ほとんどが座席指定されているのが特徴的です。自分のパソコンをネット接続することも可能です。開館時間は基本的に8時から21時までで、資料の貸出しは研究所に滞在する者に限られますが、閲覧は一定の手続きをすれば誰でも

私が滞在しているマックス・プランク知的財産研究所(MPI)は、ドイツ・バイエルン州のミュンヘンにあります。この地はとくに

可能です。蔵書データはすべて電子化されているので、インターネットでも資料検索ができます。貸出手続は専用機に身分証をかざして暗証番号を入力することですべて電子的に処理されます。また、貸出期間の延長手続はネット上でも行うことができます。

MPIはもともとLMUに附置されていた研究所が1966年に独立の研究機関となったもので、相当部分の資料をLMUから引き継いでいます。図書館の充実度がその機関の知的水準を示すということもあり、世界中の資料が熱心に集められている模様で、雑誌やレファレンス系を除いて閉架式書庫に整理されています。

また、いわゆる基本書は複数用意されるなどして利用者への便宜が図られています。この他、オンライン・データベースの館内利用はもちろん、研究室からでもBeckのオンライン出版物を利用することができます。

MPIをはじめいくつかの図書館を利用して感じることは、いずれの施設も満席であるにもかかわらず利用者が実に静粛であるということ、また図書館としてもその環境を維持するための努力をしているということです。こうした環境で思索にふける毎日は、図書館は単に本の倉庫ではなく、知識の宝庫であるということをあらためて感じる時間でもあります。



▲図書館内風景



▲図書館前の風景
(ヴィッテルスバッハ家の宮殿)

菅原 健介 著

『羞恥心はどこへ消えた?』

(190 頁) (光文社新書)



人間生活科学部 講師
楯 誠



今の若者は羞恥心に欠ける、と言われて久しい。だが、果たしてそれは事実なのだろうか。それは若者側だけの問題なのだろうか。そもそも人にとって羞恥心とはどのような意味を持っているのだろうか。こういった疑問について、多くの心理学的知見をもとに分りやすく説明しているのが本書である。

筆者によると羞恥心とは心の警報装置であり、人が何か社会的に非難や軽蔑されるような行為をしそうになると、「恥ずかしい」という感情で警報を鳴らす。この警報に従うことで、人は社会からつまはじきにあわずに生活することができるとしている。この心の警報装置は人が誰しも身につけているものだが、警報を鳴らす、つまり「恥ずかしい」と感じる基準はその人がいる時代や文化、そして社会的立場によって違ってくるのが指摘されている。そして今の若者は羞恥心そのものを失ってしまったのではなく、恥とを感じる基準が今までと大きく異なってきていることが解き明かされている。(なぜ今の若者の恥の基準が、変わってきたのかについての筆者の考察は、実際に本書を手にとって確かめていただきたい)

本書は、大きく分けて今の若者の羞恥心に関する問題と、この問題を解釈する材料となる羞恥心についての心理学的研究のレビューの2つからなっている。若者の羞恥心に関する知見も興味深いが、人一般の羞恥心に関する研究も非常に面白い内容である。特にレンタルビデオ店でアダルトビデオを借りる客の羞恥心に関する研究のくだりは、男性陣は少なからず身に覚えがあるのではなかろうか。

学生の皆さんの感想をぜひ聞きたい一冊である。

リデル・ハート 著／岡本 鐘輔 訳

『ナチス・ドイツ軍の内幕』

(287 頁) (原書房)



経済学部 教授
石田 隆造



独ソ戦について皆さんはどのようなイメージをお持ちだろうか。数年前、「スターリングラード」という映画が公開され、その冒頭でロシアの若者が徒手空拳で突撃させられ、ドイツ軍の銃火に、それから赤軍の督戦隊に皆殺しにされる光景が描かれていた。

これは決してフィクションではない。ドイツ 215 師団史を読むと、1944 年初めでも赤軍はこのような無謀な突撃を繰り返していた。ソ連が大戦で 2 千万人をを超える人命を失った一因はここにある。だからといって、赤軍を命令に盲従する愚鈍な軍隊とみなすのは早計である。戦争の苛酷な試練を経て、優れた指揮官と兵士が育ってきたことも事実だった。

ここで私が紹介する本は、大戦後に高名な軍事評論家のリデル・ハート卿がドイツの将軍たちにインタビューをし、まとめたものである。詳しい記録が利用できる現在からみれば、1948 年に出版された本書(原題 The Other Side of the Hill) は色あせているように思われるかもしれないが、ドイツの将軍たちの肉声が収録されていて、大戦に関する一級の史料であり、熟読すると、多くの発見がある。

そのなかで、クライストやルトシュテットが赤軍を評価していたことは看過できない。ただし、ブルメントリットが述べるように、「ロシア人が戦争の歴史に現れる時にはいつでも、戦争は酷烈になり無慈悲になり、大きな犠牲を払うもの」(p.215) になった。翻訳されてから 30 年以上経つため、大きな図書館に行かないと、本書を読むことはできないが、第二次大戦に関心をお持ちの方に薦めたい本である。

読書ガイド

読書ガイドでご紹介した本は図書館にあります。ぜひ一読ください。

林 文字 著
『失礼ながら、
その売り方ではモノは売れません』
(190 頁) (亜紀書房)



経営学部 助教授
荒鹿 善之

最初に筆者である林文字さんを紹介しましょう。林さんは東京都内の高校を卒業後、77年にホンダの販売店に入社。当時は女性のセールスは珍しかったそうですが、入社翌月からトップセールスとなり、BMWに入社後も新宿支店長や代表取締役を歴任しました。現在はダイエーの代表取締役会長をつとめています。



この著書は、特にBMW在籍時の彼女の奮闘ぶりが女性らしい柔らかな文体で描かれています。新宿支店長就任時は、「ミーティングには全員がそろわない」、「ショールームに活気がなく片づけが行き届いていない」など、ひどい店だったようです。しかし、彼女は「後は良くなるしかない」、「業績が悪いときほど社員の良い面に目を向けよう」と考えました。その中でも部下を褒めることを大切に、「絶対にマイナスのことを言わない」と決意しました。建設的な考え方をする人柄のようです。

業務上の具体的な工夫としては、男性のセールスマンでは思いつかないようなことが印象的です。例えば、「劇場型ディーラー」。店をどうやって活性化するかを考えたときに何か魅力的な催しが必要です。そこで彼女が考えたのがバイオリンとチェロのコンサート。すぐには販売増に結びつかないかもしれませんが、新宿支店の魅力をアピールする上でかなりの成果をあげたようです。

このように、この著書にはお客様や社員のことを第一に考える工夫が随所に盛り込まれています。学生諸君が就職をしたとき、またアルバイトをするときなどに、お客様に喜んでもらえるようなアイデアをこの著書から得ることができるのではないのでしょうか。

池上 彰 著
『そうだったのか! アメリカ』
(245 頁) (集英社)



短期大学部 教授
武田 康雄

アメリカという国の名前から私たちが連想するものは、華やかで明るいイメージのものが多くないでしょうか。例えば自由の女神、スペースシャトル、メジャーリーグ野球、ハリウッド映画、マクドナルドハンバーガー、ディズニーランド、ラスベガス等々。



確かにアメリカはその建国の歴史からも自由と平等の国であり、多くの人々の夢、アメリカンドリームをかなえてきた国です。メイフラワー号による移民以来、多くの人々が自由と夢の実現を目指して海を渡り、現在のような強大国アメリカを築きあげてきました。この強大国はその華やかなイメージとは裏腹に、建国以来つねに戦いによって多くの人の血を流し続けている国なのです。英国と独立戦争を戦い、領土拡大のためには原住民をはじめメキシコ、スペインと戦い、合衆国統一をかけては自国民同士が戦いました。そして今では海を越えた他国で自由と平等と民主主義のために闘い続けています。

領土拡大と海外での戦争、これらは自由・平等そして民主主義とは矛盾しないのでしょうか。日本にはできないことがどうしてアメリカには可能なのでしょう。この本は、華やかな印象の陰に隠れたアメリカという国の行動原理に迫り、アメリカ理解を深めるための手がかりを与えてくれる一冊です。



河添 省吾 著 『英雄伝説クリスタニア 赤き剣の戦士』 を読んで

経済学部 紙谷 真吾

復活した神王バルバスの力の前に、傭兵団「獣の牙」は壊滅し、バルバス率いるベルディア軍の進軍を阻む勢力は、もはやクリスタニア大陸には存在しなかった。

この物語は、敗残の兵である主人公レードンが、「獣の牙」を再興するためにクリスタニア全土に共闘を呼びかける旅を描いたものである。

絶望的な状況にもかかわらず、かつての仲間たちとの『打倒バルバス』の誓いを果たすために、部族間の信仰や思想、文化の違いに苦悩しながらも尽力するレードンの生き様が、この本の魅力だと思う。現状をただ悲観的に捉えるのではなく、その中に希望を求め、自分にできることを精一杯やり抜くことのたいせつさを改めて実感でき

た一冊だった。

設定の奥が深く、クリスタニアの世界独自の専門的な単語も多く使われているため、内容の把握が多少大変かもしれないが、中世風な世界の剣と魔法のファンタジーが好きな人にお勧めしたい本である。



片山 恭一 著 『世界の中心で、愛をさけぶ』 を読んで

人間生活科学部 藤原 知弥

この小説の あらすじを簡単に説明すると、主人公は朔太郎という名の高校2年生であり、物語は恋人のアキの死から始まる。生前の彼女との思い出が回想する形でストーリーが展開し、その時々朔太郎が想ったことなどが描かれているというものである。いかにもありきたりな純情ストーリーという印象を受け、まさか自分は泣いたりしないだろうと思っていたのだが、案の定涙を流し感動してしまった。そのため友人に流行遅れだと馬鹿にされてしまった。

この作品を読んでただただ感動した、という感想とともに、さまざまなことを思った。特に、強く思ったのは主人公朔太郎がとても羨ましいということである。いろい

ろ悩み、涙を流せるほど好きな人ができたということだけでなく、死んだ恋人の分も生きるという、単純なようで難しい目標みたいなものがあるということをととても羨ましく感じた。

自分は保育士になる目標をもっているが、それが自分の生きる目標といえるのだろうか。自分はなぜ生きているのだろうかと考えてしまう。もし、自分が生きる目標を持っていなかったら、死んでしまっても同じなのではないかと思った。実際にはそんなものがなくとも普通に生きていけるのかもしれないが、いろいろと考えさせられる小説だった。



松本清張 著『点と線』を読んで

法学部 森 政史

私が「なぜ、この本『点と線』を選んだのか？」という、まず一つ目は推理小説が小説の分野で一番好きだからである。そして二つ目は、この『点と線』を私が一番最初に読んだ本だからである。この本を読み終えたとき、私は推理小説が好きになり、その後にはさまざまな推理小説を読んできましたが、今だに『点と線』のあらすじを、ほとんど忘れていません。そして、初めて読んだときと違った「おもしろさ」を見つけることができると思い、読みかえすことにした。

さて、この『点と線』は、推理小説の中の「アリバイ破り」というジャンルに属している。この「アリバイ破り」は、一般の推理小説と違って、犯人の鉄壁といえるアリバイを探偵がどのように破っていくか

が、とてもおもしろいと思う。なぜなら、この『点と線』では、犯人が毒殺した男女を九州の海岸に並べ、いかにも心中のように見せ、しかも殺害された女の同僚に、被害者二人が東京駅のホームに並び、特急列車に乗ったところを見せれば、心中説を覆すことができない。しかも九州で発見されたときに犯人は、北海道にいたというアリバイを持っている完全犯罪である。

だが、二人の探偵は、この鉄壁のアリバイを、少しずつ打ち破っていき真実にたどりつく。この不可能に挑戦する部分がこの本をいっそうおもしろくしているのだと思う。ぜひこの本を見つけたら読んでみてください。探偵の苦渋がよく分かる本だから。



井伏鱒二 著『黒い雨』を読んで

経営学部 谷口健太郎

この「黒い雨」は、昨年がちょうど終戦から60年経過し、この戦争を忘れないためもう一度読んでみました。この本は、広島で被爆した重松が姪の「矢須子」の縁談をまとめようとするが、矢須子は原爆病患者になったため、縁談もなかなかまとまらない様子を、日記に清書して村人の誤解を解こうとする内容です。本を読んでいくと、原爆後の街や人々の描写は読みつづけていくうちに体のあちこちが痛くなりました。それほど原爆の悲惨さが生々しく描かれているものでした。

原爆の悲惨さは実際広島にはいってないためわかりませんが、高校のときに修学旅行で長崎の平和記念館を見学して原爆投下後の街の風景や人々の様子が鮮明に写真として残っており、目を背けたくなる衝撃を受け原爆の残酷さを知りました。原爆は非人道的で大量破壊的な爆風や熱線に加えて、

遅発性障害を引き起こす放射能線は残酷極まりないものだと思います。また原爆は放射能を大量に浴びた病人を看護していた人が、先になくなった「矢須子」のように後に原爆症を発病する人もいます。そして生き残っても、常に発病の恐怖と世間からの偏見に苦しめられています。読後に原爆をインターネットで調べてみると、ある外国人が広島を訪れたことを言っていました。「原子爆弾は単に大きい爆弾だと思っていた」。僕らは、小さいころから原爆の恐ろしさを聞かされているが、意外と世界の多くの人には「大きな爆弾」程度の認識しかないのかもしれない。だとすれば、唯一の被爆国に住む日本人として、核の悲惨さを訴えつづけ、伝え広めていくことが必要だと思いました。



お知らせ Information

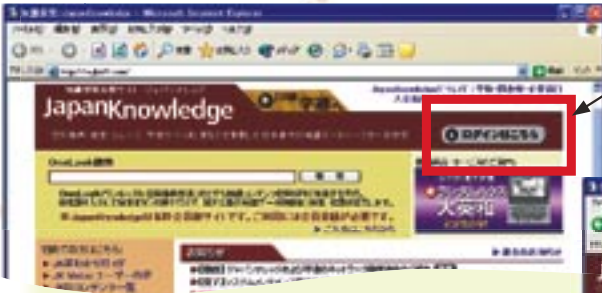
Our business in this world is not to succeed, but to continue to fall in good spirits.



■名古屋経済大学図書館ホームページからのご案内

- インターネット・データベースの内、**JapanKnowledge (ジャパンナレッジ)** を紹介します。図書館 HP のデータベースをクリックすると、下のページが表示されます。

JapanKnowledgeは、百科事典などの横断検索や、世界地図と連動したニュースなどのデータベースです。インターネットの検索エンジンで得られる玉石混交の情報ではなく、出典を明記できる“情報”です。レポート等にぜひご利用ください。



- 画面右上の「ログイン」をクリックして検索してください。
- 利用終了後は、必ず「ログアウト」をしてください。



- ① 検索語を入力する
- ② 検索領域・条件を設定する
- ③ 検索対象を選ぶ
- ④ 4つの検索ボタンから、目的に合った検索ボタンを選び、クリックする

- 辞書の検索 (百科事典、国語辞典等を一括検索)
- 記事の検索 (『週刊エコノミスト』等各种コラムを検索)
- URLの検索 (大学、行政機関等の約4万のURL検索)
- 書籍の検索 (amazon.co.jp等のデータベースを検索)

図書館2階パソコンコーナー・情報センター・サテライト・研究室より利用できます。
なお、図書館2階～5階のOPAC検索端末からは利用できません。

■新着図書のご案内

- 平成17年度名経祭バザーに際し、図書等を多数ご提供いただきありがとうございます。バザーの売上の一部で話題の図書『生協の白石さん』『キッパリ!一たった5分間で自分を変える方法』『電車男』絵本『音の中から…』『あたまをひねろう!世界のなぞかけ昔話』等を購入しました。
- 本学卒業生の江戸川乱歩賞受賞者 神山裕右さんの第2作『サスツルギの亡霊』は、3階新刊コーナーにあります。皆さんぜひお読みください。



■図書館利用マナーの順守について

- 最近、図書館の利用マナーを守らない方が、見受けられるようになりました。例えば、飲食、本の毀損、携帯電話の使用等の苦情がよせられています。皆様方の利用マナーの順守をよろしくお願いいたします。
- 入館者の方が静粛で快く利用できる館内環境を維持する一環として、このたび各階に監視カメラを設置しましたのでご理解ください。図書館としては一人でも多くの方が気軽に図書館に足を運び、快適にご利用いただけるよういっそう努力したいと思っております。

図書館だより Vol.51 2006.4

発行所 名古屋経済大学 図書館 〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
名古屋経済大学短期大学部 ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>
発行 年2回
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171

(「図書館だより」は本学図書館ホームページでもご覧いただけます)